

氏名（本籍）	滝沢 誠
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博乙第 2717 号
学位授与年月日	平成 26 年 12 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	古墳時代の軍事組織と政治構造

主査	筑波大学 教授	博士（文学）	常木 晃
副査	筑波大学 教授	博士（文学）	根本 誠二
副査	筑波大学 教授	Ph.D.	三宅 裕
副査	聖徳大学 教授	博士（文学）	松尾 昌彦

論 文 の 要 旨

本論文は、古墳に副葬された鉄製甲冑の分析から古墳時代中期における軍事組織の形成過程を実証的に跡づけること、および地域における小型古墳の成立過程や大型古墳の存在形態の検討により古墳時代の政治構造にみる段階的変化を明らかにすることの2点を通じて、ヤマト王権による初現的な軍事組織がどのような政治的背景のもとに成立したのかを考古学的に解明し、あわせて国家形成期の軍事組織がもつ特質について考察することを目的としている。その構成は、序章に続く第Ⅰ部第1～3章と第Ⅱ部第4～8章に終章を加え、計10章からなる。

序章「研究の目的と方法」では、本論の目的を明示したうえで、古墳時代の軍事組織の研究や古墳の存在形態をめぐる地域研究が従来どのような視点や方法にもとづいて展開されてきたのかを整理し、本論の具体的な課題と各章で論じるテーマの位置づけを提示している。

第Ⅰ部「鉄製甲冑と軍事組織」は、古墳に副葬された鉄製甲冑の分析を通じて、古墳時代中期における軍事組織の形成過程を論じたものである。古墳時代中期の鉄製甲冑は、近畿中央部において一元的に生産されたもので、ヤマト王権による軍事組織化の動向を示すきわめて有効な資料になりうるとの基本認識を出発点としている。

第1章「鋳留短甲の変遷」は、鉄製甲冑から古墳時代の軍事組織を分析するための時間的空間的枠組みを整備することを目的として、鋳留短甲の編年について論じたものである。本章では、かつて自らが提示した基本的変化の方向性を認めつつ、細部の内容について見直しを加え、最新の資料状況に即した鋳留短甲の多系編年を再構築した。

第2章「鉄製甲冑の生産と供給」は、鉄製甲冑の生産・供給体制を明らかにするうえで重要な手がかりとなる「同工品」の問題について論じたものである。本章では、もっとも出土数の多い横矧板鋳留短甲を対象として最小製作単位として、これまでほとんど論じられてこなかった「同工品」の抽出に向けた検討をおこなった。その結果、横矧板鋳留短甲における2つの技術系統を明らかにし、技術系統の中で細部の共通性が高いグループには、「同工品」として把握しうる製品群が存在することを指摘するとともに、古墳時代中期には「間接配布型」と「直接配布型」の二者の甲冑の

供給体制が存在したことを指摘した。

第3章「甲冑出土古墳からみた古墳時代前・中期の軍事組織」では、甲冑出土古墳の墳形や規模、分布などの諸側面を分析することにより、古墳時代前・中期における軍事組織の形成過程とその特質について論じた。甲冑出土古墳は、古墳時代前期には近畿地方などの前方後円墳が多数を占めるのに対し、中期前葉以降には西日本の中小古墳、そして中期後葉からは特に九州から関東に及ぶ中小古墳の事例が増加する。こうした推移から、ヤマト王権の中枢部に生まれた階層的秩序を持つ軍事組織が、当初は各地の有力首長の在地支配に依存しつつ編成していた地方の軍事力を、段階的にその傘下に組み入れていった過程が想定できた。特に中期後葉には中小古墳被葬者を対象としたヤマト王権による直接的な軍事編成がより広域に展開したものと理解でき、中期前葉にも劣らない軍事組織形成上の重大な画期であると評価した。

第II部「古墳の存在形態と政治構造」は、小型古墳の成立過程や大型古墳の存在形態を分析し、古墳時代政治構造の段階的変化について論じたものである。事例分析に際しては、そうした問題を論じるに相応しい先行研究や資料の蓄積が認められる地域を具体的に挙げて議論を進めた。

第4章「古墳時代前半期における小型古墳の展開」は、静岡県志太平野を対象として、古墳時代前半期における小型古墳の成立過程を論じたものである。同地域には古墳時代前・中期の前方後円（方）墳が存在しない一方で、前期から中期前半にかけての小型古墳が多数認められる。それらの墳墓要素を多角的に検討した結果、中期前葉の小型古墳は、近畿地方などに系譜をもつ小型古墳特有の要素を多く備えていることが明らかとなった。このことから、中期前葉の小型古墳は、近畿地方を中心とした小型古墳被葬者間の広域的な結びつきを契機として成立したものであると推論した。また、その背景として、前期の前方後円（方）墳を築くことのなかった地域に、ヤマト王権による直接的な支配がいち早く波及した可能性を指摘した。

第5章「小型古墳の墳墓要素と広域交流」は、棺床に小土坑をともなう特異な埋葬施設の検討を通じて、古墳時代前半期における小型古墳の性格について論じたものである。棺床の小土坑は、古墳時代前期末～中期前葉に営まれた小型古墳に特徴的に認められ、系譜は近畿地方の前期古墳に採用された排水用土坑に求められる。その分布は近畿以東に偏在する傾向があり、当該埋葬施設のひろがりには小型古墳被葬者間の広域的な交流が想定されること、また背景には、古墳時代前期末～中期前葉に一部地域の小型古墳被葬者を支配秩序に組み込もうとしたヤマト王権の動きが読みとれることを指摘した。

第6章「前方部短小型前方後円墳の性格」は、東日本における斜交埋葬施設の実態を整理し、短小な前方部をもつ前方後円墳の性格について論じたものである。前方後円墳などの堅穴系埋葬施設にしばしば認められる斜交埋葬施設については、頭位原則とのかかわりを指摘する意見がある一方で、帆立貝式古墳や纏向型前方後円墳に多く存在するという特徴が指摘されている。その検証を目的として東日本の斜交埋葬施設全般について検討した結果、斜交埋葬施設は前方部短小型の前方後円墳を中心に古墳時代後期にまで存続していることが明らかになった。加えて、前方部短小タイプには斜交に対する共通の造墓意識が継続的に認められることから、古墳時代中期以降の前方部短小前方後円墳に想定されてきた従属的な性格は、その初現段階（纏向型前方後円墳）にまでさかのぼる可能性があることを指摘した。

第7章「大型古墳の存在形態と政治変動」は、筑波山周辺地域の事例分析を通じて地域首長墳の変遷過程を跡づけ、古墳時代の政治構造と支配領域の問題を論じたものである。同地域内の首長墓は、水系を単位とした分布状況から12の小グループに分けられ、全体として6段階の変遷が認められる。各段階にはグループを越えた同調性の高い変化が認められ、それらは基本的に地域首長層の政治的再編成をともなう政治変動を反映したものであろうと理解できることから、かつて論じられたような首長権輪番制説は成立しがたいことを指摘した。また、後期段階の前方後円墳がのちの評（郡）域にほぼ対応しているという学説の妥当性を検証するとともに、首長墳造営の画期には、

政治構造上の変化にとどまらず、支配領域の再編成を伴っていた可能性が高いことを指摘した。

第8章「古墳時代政治構造の地域的把握」では、駿河地域における事例分析を通じて、前章と同様の視点から古墳時代の政治構造と支配領域の問題を論じた。対象地域内の大型古墳の変遷は大別7段階に整理することができる。各段階には地域首長層の政治的再編成をともなう政治構造の変化が認められ、対象地域全体の構造的な理解として、前期を地域移動型優占構造、中期前葉～中葉を地域横断型重層構造、中期後葉～後期を地域分立型並列的構造と評価した。また、それらの構造転換に際しては、前段階までの支配領域を再編する動きが生じていたものと想定した。さらに、地域における大型古墳の段階的変化を中央の動きに連動した政治変動として理解する先行研究には一定の有効性が認められるものの、そこには政治構造の変化や支配領域の再編という理解を十分に組み込む必要があることを指摘した。

終章「総括と展望」では、本論の結論として、古墳時代中期に本格化するヤマト王権による軍事組織形成への動きは中期前葉と中期後葉に大きな画期があり、前者は地方有力首長を介した組織化への動き、後者は地方有力首長の関与を排し、王権がより直接的に地方の中間層を組織化する動きとして捉えられることを論じた。また、各地域にみられる大型古墳（首長墳）の段階的な変化には総じて共通の画期が認められ、その背景にはヤマト王権の主導により進められた政治構造の変革や支配領域の再編という動きがあったことを指摘した。そして、とくに大がかりな変化が認められる中期前葉と中期後葉は、軍事組織形成のうえでも重大な画期があることから、それらの時期に生じた政治構造の変化は、ヤマト王権の軍事的動向と密接なかわりをもつことを指摘した。ただし、古墳時代の軍事組織は、中期後葉の一時期を除けば、基本的には地域首長による在地支配の枠組みに依存したものであり、そこから独立した組織としての体制は十分には整わず、その点において国家的な軍事組織としては未発達な側面をあわせもつものであったと結論づけた。

審 査 の 要 旨

本論文は、全国から出土した鉄製甲冑についての極めて詳細な観察と比較研究に基づいて、古墳時代中期のヤマト王権による軍事組織の形成過程を復元するとともに、地域において小型古墳が出現する過程や大型古墳の在り方から古墳時代政治構造の変化を議論し、ヤマト王権による初期の軍事組織の整備とその性格を明らかにした労作である。第Ⅰ部では、特に鉄製甲冑の最少製作単位である「同工品」を同定し、そこから甲冑の供給体制の違いを見出した点が特筆される。また第Ⅱ部では、従来在地の古墳としてしか評価されてこなかった東日本の前・中期小型古墳の特性やその在り方に着目して、ある段階からのヤマト王権との直接的な結びつきを指摘した点などが特筆されよう。古墳時代中期前葉と後葉にヤマト王権の軍事編成上の画期があり、前者は地方有力首長を介した間接的な組織化への動き、後者はヤマト王権によるより直接的な組織化への動きとした結論もおおむね叩首できよう。本論文全体の際立った特徴は、あくまでも考古学的資料の詳細な実証的研究に依拠しながらも、古墳時代の軍事・政治組織の研究に数々の新たな視角を提供している点にあり、学界および古墳時代研究の進展に大いに貢献するものと評価することができる。

平成26年10月22日、人文社会科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。なお、学力の確認は、著

者が「人文社会科学研究科論文審査等実施細則」第 10 条 (2) に該当することから免除し、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって著者は、博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。